

画家に愛された神話の里

館山最南端の布良(めら)は、神話のふるさとである。天富命(アメトミノミコト)が阿波忌部(いんべ)一族を率いて上陸したといわれ、阿由戸(アイド)の浜には女神山・男神山がそびえ、水平線には富士山や伊豆大島・利島・新島・式根島などが連なって見える。

古くからマグロ漁で栄えた漁村で、明治期には富崎村といった。水難事故も多く、冬の夜空に輝く赤いカノープスは「布良星」と呼ばれ、亡くなった漁師の魂だという伝説もある。



布良崎神社から見た富士山



青木繁《海の幸》 石橋財団石橋美術館蔵 (重要文化財)



1904(明治37)年夏、画家の青木繁(あおきしげる)は、友人の坂本繁二郎・森田恒友、恋人の福田たねとともに布良を訪れ、『海の幸』を描いた。4人の滞在を世話した漁家の小谷喜録(こたにきろく)は、水難救助会看守長や村会議員も務めていた。

布良崎神社の祭礼では、男衆が1トンの大神輿を担ぎ、夕日の海に入っていく「御浜くだり」がある。勇壮な神事がインスピレーションとなって、『海の幸』の群像が生まれたのではないかと考えられている。



波の伊八《龍》 円光寺蔵

翌年、青木は身ごもったたねを伴って再び館山を訪れた。滞した円光寺では、本堂の板戸4枚に焼釘で荒々しい海景を描いている。中央には岩に砕ける大波、右手には富士山、左手には伊豆の島々。その情景はまるで、円光寺にある龍の欄間彫刻に似ている。その作者は、波の伊八と呼ばれる江戸期の安房を代表する彫物師で、葛飾北斎など多くの芸術家に影響を与えたともいわれる。



青木繁《海景(円光寺板戸)》 個人蔵

青木繁「海の幸」記念館

小谷家住宅 (館山市指定有形文化財)

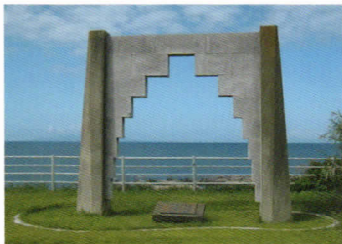
築130年の分棟型民家。少子高齢化の進む漁村の活性化を旨とし、「青木繁「海の幸」誕生の家と記念碑を保存する会」が設立され、全国の画家とともに募金を進め、修復工事を経て2016(平成28)年春に公開となった。



- 所在地 〒294-0234 千葉県館山市布良1256
- 開館日 土・日曜 (年末年始・お盆時期を除く)
- 開館時間 10:00~16:00 / 10~3月は15:00まで
- 入館料 一般 200円 小中高 100円
(維持協力金)
- 友の会年会費 2,000円 (特典:入館無料)
郵便振替 00150-6-616201
青木繁「海の幸」記念館



船田正廣「刻画・海の幸」ブロンズ



青木繁「海の幸」記念碑 (生田勉設計)

布良は美術界の聖地と呼ばれている。壁画家の寺崎武男は館山に住み多くの神話を描き、安房神社や布良崎神社に奉納している。倉田白羊も妻の実家に近い館山に住み、児童自由画教育を推進した。新宿中村屋サロンで活躍した中村彝(つね)、晩年の青木に指導を受けた多々羅義雄、水彩画を広めた大下藤次郎など、多くの画家が館山を愛し、作品を残している。



寺崎武男《祖神を偲ぶ天富命の図》
安房神社縁起壁画



倉田白羊《水門》
館山市立図書館蔵



中村彝《海辺の村(白壁の家)》
複製:館山中村屋蔵



多々羅義雄《房州布良を写す》
千葉市立美術館蔵